

エッセイ

やじ馬昆虫撮影記

(その2 春の女神, ギフチョウ)

千葉大学大学院 准教授

野村 昌史 (のむら まさし)

「春の女神」と言えば昆虫好きの人ならすぐに「ギフチョウ」と答えるだろう。日本に土着しているチョウは約240種とされるが、早春にだけ出現するチョウはツマキチョウなどほかにもいるものの、やはり春の女神と言えばギフチョウにはかならない。

子供のころ、図鑑でしかギフチョウを見たことがなかったが、いつかは本物に会いたいものだと思っていた。小さいころから昆虫が好きだったものの、捕まえても飼育するのが好きで標本にすることはなかった私は、食草や休眠が長い生活史で飼育するには敷居が高いギフチョウを自然に避けていたのかもしれない。また当時は既に近所で見られるチョウではなかったのも確かだ。

時は流れ、大学で自然観察のサークルに入った私は、フィルムの一瞬レフのカメラを手にし、あちらこちら出かける日々を送っていた。そしてそのサークルの恒例企画であるギフチョウ観察に出かけたのだ。場所はギフチョウ観察地としてはまさに王道といえる岐阜県の谷汲で、当時走っていた名古屋鉄道谷汲線の終点で下車して、そのまま駅宿し翌朝から観察するというあの時代らしい企画であった。

満開の桜が咲き乱れる穏やかな日射しのなか、ギフチョウは舞っていた。桜をバックに優雅に飛ぶその姿は、まさに「女神」だと実感した。そして林床のカタクリを訪れ、カンアオイに産卵する姿は、生命の躍動を感じるものであった。ただカメラマンとしては初心者であった私は、この感動を伝える満足な写真を残すことはできなかった。それでも満開の桜並木の間をゆったりと飛ぶギフチョウの姿は、今も脳裏に焼き付いている。

いつか再びこの目で見てみたい幻想的かつ鮮やかな光景である。

いつの日か・・・と思いつつも、4月初旬は新学期で何かと忙しい・・・とてもギフチョウを見に行く時間はないと諦めていた。しかしあるとき友人が「近場の」ギフチョウ観察に誘ってくれた。有名な場所らしいが、神奈川県に発生地があるという。神奈川なら日帰りが可能である。休日に喜んで出かけたのは言うまでもない。

その日は天候にも恵まれ、まだ明るい林の中でひらひらと舞う女神の姿を見た・・・実に30年ぶりの対面であった。今回は以前と違って桜並木はなく、カタクリも多くない場所であったが、枯れ葉で休んだり花の蜜を吸ったりするギフチョウの写真を撮ることができた(図-1)。たとえ環境が違って、嬉しい出会いだった。

こうして久しぶりの再会に満足して山を下ったが、ふもとの桜の樹にギフチョウがいるではないか。まさに桜の花から花へ蜜を吸っている姿であった。慌ててカメラを構え、写真に残すこともできた(図-2)。

童謡「ちょうちょう」では、「菜の葉に飽いたら桜にとまれ」と歌われているが、私はこの歌の主人公であるモンシロチョウが、桜の花に来ているのをまだ見たことがない。でも桜の花を訪れ吸蜜するチョウがいることを知った。しかもそのチョウが春の女神ギフチョウなのだから、何の文句もない完璧な場面であった。

さて、ギフチョウと言えばカタクリへの訪花、というのが定番のシーンであるが、未だにこの撮影ができていない。「見たい撮りたい」はまだまだ続く。



図-1 枯れ葉で休むギフチョウ

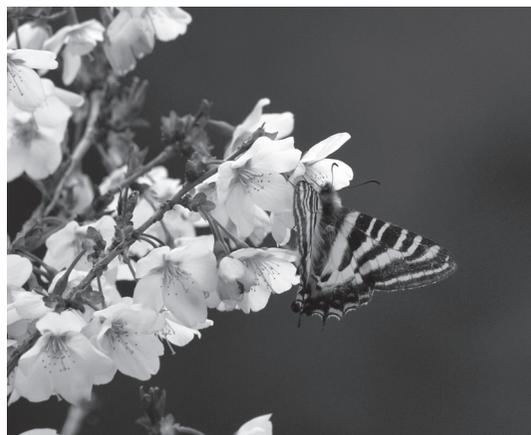


図-2 桜の花の蜜を吸うギフチョウ

NEWS

農家子弟に奨学金、受賞者3名を決定

報農会

公益財団法人報農会（田付貞洋理事長）はこのほど、平成27年度の農家子弟奨学金の受賞者3名を決定した。同奨学金は、植物保護に関心を持ち、農業後継者として科学的知識や技術を深めるために、県立農業大学校等に在籍して優秀な研究を行った農家子弟に贈られているもので、昭和58年度に発足して以来、今回で33回目、延べ受賞者数は152名におよんでいる。調査研究課題、氏名および学校名は次の通り。

「出穂期の違いが割れ籾発生と斑点米カメムシ被害に及ぼす影響」小原俊介（岩手県立農業大学校農産園芸学科農産経営科2年）、「ブドウ『藤稔』のジベレリン1回処理法による無核化が省力化と果実品質に及ぼす影響」齋藤遙香（群馬県立農林大学校農業経営学科花き・果樹コース1年）、「トマトの総合的病害虫管理」上野巖（兵庫県立農業大学校農産園芸課程野菜専攻2年）。

平成27年度第3回講演会を開催

東京農業大学・生物的防除部会

東京農業大学総合研究所研究会・生物的防除部会（和

田哲夫会長）は2月10日、東京農大・食と農の博物館で、平成27年度第3回講演会を開催した。

講演は2題。最初に登壇したのはデュボン農業製品事業部マーケティング部部長の笹島敏也氏。「新ジアミド系殺虫剤サイアジビルと天敵利用」と題し、サイアジビルの開発経過や特長について述べた上で、同剤が天敵などへの影響がほとんどなくIPM適合剤として使用できることを促成イチゴやナスを事例に詳述した。続いて石



IPMに関わる技術発表に活発な質疑応答が交わされた

青森りんごマルシェを六本木ヒルズで初開催—JAつがる弘前とBASFジャパン

JAつがる弘前とBASFジャパンは2月5日、都内港区の六本木ヒルズ・カフェスペースで、「JAつがる弘前×BASF 青森りんごマルシェ～農業、それは最も大切な仕事～」を開催した。「農業、それは最も大切な仕事（Farming, the biggest job on earth）」と題した農業応援キャンペーンをグローバルに展開しているBASFとJAつがる弘前がコラボレーション。外国人の往来も多い都心の六本木ヒルズでマルシェを開き、サンふじや王林など青森りんごの展示販売を通じてブランドをアピールした。

オープニングセレモニーでは、BASFジャパンの大津武嗣副社長執行役員が、「農家のために何ができるのか、その答えのひとつとして今回初めてマルシェを開催した。産地ではブランド力をどう上げていくのが課題のひとつとなっている。BASFの化学の力と農業生産現場のニーズを掛け合わせることで、新たなブランド力を創造していきたい」とあいさつした。続いて、JAつがる弘前の松山憲一代表理事常務が、「青森県の約四分の一のりんごを生産しているのが、JAつがる弘前だ。生産現場では、人と環境に優しい殺虫剤カスケードや殺菌剤ナリアにお世話になっている。都心でこのようなマルシェを開くのは初めてであり、海外の人にも青森りんごのおいしさを知ってもらえると期待している」と述べた。また、化学品・農業統括本部農業事業部のレアンドロ・マルティンス執行役員は、「祖国ブラジルでも、子供の時から高品質なりんごの代名詞といえば日本のふじだった。BASFは昨年、創立150周年を迎えることができた。引き続き独自の化学製品を持続的に提供し、生産者の皆様をサポートしていきたい」と語った。

会場では、葉とらずふじや王林、りんごジュース（希望の雫、黄色い林檎）を展示即売。アトラクションとして津軽三味線の演奏も行われ、終日、一般消費者で賑わいをみせた。



左からマルティンス、松山、大津の各氏

原バイオサイエンス営業統括部特販グループマネージャーの森光太郎氏が、「石原産業の生物農薬事業の紹介と天敵アカメガシワクダアザミウマの開発について」をテーマに講演。同社の生物農薬事業の展開を述べるとともに、新規登録したアカメガシワクダアザミウマや天敵のための紙製シェルター「バンカーシート」等の紹介を行った。

植物保護と植物工場、SIP 合同研究会を開催

つくば農林ホールで、農研機構

農研機構は2月12日、茨城県つくば市のつくば農林ホールで、戦略的イノベーション創造プログラム（SIP）次世代農林水産業創造技術（アグリイノベーション創造）の中の「統合オミクス情報を利用したトマトの体系的最適栽培管理技術の開発」と「持続可能な農業生産のための新たな総合的植物保護技術の開発」について合同研究会を開催した。主催者として農研機構野菜茶業研究所の本多健一郎所長が、「前者は植物の生理障害などを遺伝子レベルから解析することにより植物工場におけるトマトの収量増加を目指す研究分野、後者は農業に依存した病害虫管理から脱却し、害虫の行動制御や植物の抵抗性発現、自然界における生物間相互作用等に着眼した総合的防除を目指す研究分野であり、その実用場面のひとつが施設栽培トマトだ。同じ施設栽培トマトを接点として連携を深め研究を進めれば、これまでにない次世代型農業に一步近づけることができる」などとあいさつした。

セクション1「新たな総合的植物保護技術」の講演は、「アザミウマ忌避剤、コナジラミ忌避剤の開発」安部洋（理研・バイオソースセンター）、「コナジラミ忌避剤によるペアリング阻害と音響的な解析」上宮健吉（石原産業中央研究所）、「天敵タバコカスミカメによる微小害虫防除技術」日本典秀（農研機構中央農業総合研究センター）、「農業に替わる病害虫抑制技術『紫外光（UV-B）照射』」佐藤 衛（農研機構花き研究所）・神頭武嗣（兵庫県立農林水産技術総合センター）、「赤色光を利用した施設ナス・キュウリのアザミウマ防除」柴尾 学（大阪府立環境農林水産総合研究所）。

またセクション2「オミクス解析利用トマト栽培」では、オミクス解析を利用した栽培体系や実際の取り組み、生理障害の克服などに関して研究成果が発表され、最後に農研機構野菜茶業研究所の中野明正氏が、「SIP 植物工場の成果の連携と展開」と題してしめくくった。

ケム・チャイナによる買収提案について記者会見を開催

シンジェンタ ジャパン

シンジェンタ ジャパン（篠原聡明社長）は2月15日、都内中央区のオフィスタワー X 会議室で、今月初旬に明らかとなった中国化工集団（ケム・チャイナ）による買収提案に関する一連の報道を受け、記者会見を行った。両社はケム・チャイナがシンジェンタの株式を1株当たり480スイスフラン、総額約430億ドル（約5兆3千億円）で取得することで合意。今後、目論見書の作成や株式の公開買い付け等を経て、年内には買収が完了する予定であることを明らかにした。

篠原社長は、シンジェンタが今後もスイスに本社を置くグローバル企業として現体制を維持し事業運営を継続していくことを強調した上で、取締役会が今回の買収提案を受け入れた背景として、「当社の優れたポートフォリオや農業市場における地位、社員の質などに関して高い企業評価を得たことが大きい。事業戦略の継続性と農業や種子の開発など革新的技術に対する長期的投資が可能になり、新興市場、とりわけ農業と種子を合わせ約1兆3千億円と見込まれる中国市場でさらなる事業拡大が可能となった。数年後の新規株式公開も視野に入れている」と述べた。

今回の買収により、昨年から浮上していた同社種子部門の売却計画は中止となり、従来通り事業を継続することとなった。また、同じくケム・チャイナの傘下に入っている農業の大手ジェネリックメーカー、ADAMAとの関係に関しては、「同一傘下ではあるが、事業展開の方向性は全く異なる。オペレーションはそれぞれ独自に展開する」（篠原社長）ことを明言した。



次世代の農業技術を目指した合同研究会



買収交渉の経緯を説明する篠原社長